



Title	明治期における清国向け日本陶磁器 (2)
Author(s)	前崎, 信也
Citation	デザイン理論. 2013, 62, p. 69-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56416
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

明治期における清国向け日本陶磁器 (2)

前 崎 信 也

キーワード

輸出陶磁器, 意匠, 神戸港, 大阪港, 清国

Export ceramics, design, Kobe port, Osaka Port, Qing China

はじめに

1. 清国向け輸出陶磁器の意匠

1-1. 農商務省商工局編『輸出品ノ製作上ニ及ホス海外ノ風習』

2. 清国向け陶磁器輸出における神戸港の役割

2-1. 神戸開港

2-2. 神戸港と清国商人

2-3. 清国向け日本陶磁器と神戸港, 大阪港

おわりに

はじめに

近代における日本陶磁器の海外進出は、明治期における美術工芸産業の西洋化・近代化の成功例としてこれまで紹介をされてきた。『デザイン理論』60号掲載の拙稿において、その成功の裏には、1850（嘉永3）年に始まった太平天国の乱を契機とする清国陶磁産業の長年の低迷が深く関わっていたことを指摘した。日本陶磁器は、中国の磁器生産の中心である景德鎮停滞の機に乗じて清国磁器の世界的な販路を脅かしただけでなく、1880年代以降には清国市場も重要な販路の一つに加えることに成功したのである¹。

このような背景を踏まえて、本論考では清国向け陶磁器輸出の全体像を更に明らかにすることを目的とし、前半と後半に分けて以下の2つの問題について論じる。前半では、1880年代から盛んに輸出された清国向け陶磁器に用いられた意匠についてとりあげる。文献資料を元に検討し、陶磁器の意匠における清国人の嗜好や日清両国の相違点について述べる。後半では、清国向け陶磁器の輸出港として重要な位置を占めていた神戸港、大阪港の役割に注目する。文献資料や統計資料の検討から、明治期の日本の美術工芸の輸出、特に清国向け輸出の拠点となっていた二港の清国商人（清商）による陶磁器輸出について検討する。

1. 清国向け輸出陶磁器の意匠

清国向けの陶磁器輸出は欧米向けに比べて輸送費の面で優位であり、それが日本の陶磁器業が清国に注目した理由であった²。更に器形や意匠に十分な配慮が必要な欧米諸国向けとは違い、国内向けに生産された製品の中から、清国人の嗜好にあうものを選んで輸出が可能であるという魅力的な市場でもあった³。しかし、利潤の少ない安価な製品が清国向け製品の大多数を占めていたために、器形やサイズ、その意匠に十分留意し、彼の地で需要がありそうな製品が中心に輸出されたことを忘れてはいけない。そこで、ここでは当時清国国内で需要が高かった陶磁器の意匠がどういったものであったのかについて検討したい。

1892（明治25）年の官報において、在天津副領事であった荒川已次（1857-1949）は、天津における日本陶磁器の商況報告の中で、清国向け陶磁器製造に関しての提言を行っている。荒川によれば、市場拡大のためには「形體ハ清國品ニ模擬シ漫ニ新意匠ヲ加ヘサル事」、「著色形體ハ同式ナル事」と清国品に模した製品を輸出することが必要であると指導をしている⁴。

1905年（明治38）、天津在住の記者である井上孝之助（生没年未詳）は中国北部における日本陶磁器の商況について述べているが、内容は先述の荒川報告に比べて詳細になる。清国北部で使用されている鉢、茶壺（急須）、茶碗、皿といった器種の一般的な寸法などを解説し、好まれている意匠についても述べられている。それによると、当地では縁起を喜ぶ習慣が顕著なもので、四君子、桜、柘榴、芭蕉、桃、蝙蝠、龍、獅子、麒麟、鳳凰、「喜」字、山水、人物等の意匠が多く用いられ、特に「喜」字は多く用いられているとする⁵。

1906（明治39）年、窯業技師の塩田真（1837-1917）も、清国向けに適した製品について言及している。清国では花瓶、香爐、額、燭臺、ランプ、井鉢、菓子器、壺、蓆立、徳利等いかなる製品においても、一個では売れないので一対で作らなければならないが、例外として花瓶、香爐、燭臺を各一個ずつにして、三具足とするならば問題はないとする。意匠については、四君子、松、牡丹、鶴、孔雀、鳳凰、「壽」字等の目出度いものや、南宗画の画題で、不老、長春、百事、如意等の一対のものや、龍と虎といったものが良いとしている。補足として、アール・ヌーボー風の意匠は使わないよう指導しているのは興味深い⁶。

1-1. 農商務省商工局編『輸出品ノ製作上ニ及ホス海外ノ風習』

上記の3件の報告内容はそれぞれが重要な内容を含むものではあるが、広大な版図を有する清国の事情を把握するには物足りないと言わざるを得ない。この問題を検討する上で重要な資料に、1907（明治40）年に農商務省商工局より発行された『輸出品ノ製作上ニ及ホス海外ノ風習』がある⁷。本書では在朝鮮、清国、フィリピン、タイ、インド、アメリカ、ブラジル、アルゼンチン、オーストラリアの大使館・領事館の所在都市において好まれる意匠や器形につ

いて、詳細な説明がなされている。本記事は農商務省商工局によってまとめられているため、政府が1907年の時点で清国市場の更なる開拓に注目をしてきたことがみてとれるだろう。また、同様の内容が、同年発行の『大日本窯業協会雑誌』に「輸出品の製作上に及ぼす海外の風習」という題で報告されている⁸。当時多くの窯業関係者が目にした同誌に掲載されていることから、この内容が実際の製品の輸出時に参考にされたと推測することができる。

清国の都市で掲載されているのは、渤海に面する牛莊（現在の遼寧省営口市）、天津、長江流域の湖北省沙市、重慶、湖南省長沙、そして、南部沿岸の浙江省杭州、福建省の福州と廈門である。各都市で好まれる製品の構造、形態、図様、配色、商品の販売に関する風俗習慣といった項目に分けて解説されている。（資料1）は、報告のあった都市で嗜好される意匠、忌避される意匠に関してまとめたものである。好まれる画題には日本でも一般的なものが多く、清国向けに輸出される陶磁器は、国内向け製品からの特別な改変が不要な場合が多かったことが確認できる。

例えば鳥でいえば、鶴、鷹、孔雀、鴛鴦、雄鶏、錦鶏が好まれ、烏や梟は嫌われる。鳥以外の動物では、蝙蝠、鹿、馬などが好まれ、亀、兎、蛇、狗などは避けるべきであるとされる。好まれる植物は牡丹や梅、桃、葡萄といった定番の意匠の他にもさまざまな植物が挙げられている。この他に嗜好される意匠としては、「壽」や「喜」などの文字や、中国の故事を題材にした歴史画がある。他方、理由についての記載はないが、楓樹と梧桐（鳳凰と一緒に描かれれば可）は忌避されるとある。

一部の意匠にはそれが嗜好される理由及びされない理由が述べられている。それをまとめたものが（資料2）である。好まれる意匠が用いられる理由の多くは既知のものが多いが、ここで注目したいのは、少数とはいえ忌避される意匠の中に、日本では好まれる亀と兎が含まれていることである。驚くべきことに亀はほぼ全ての都市で避けるべき意匠として挙げられている。その理由は二つ。まず、亀は「ワンバ」という俗称で呼ばれており、これが「忘八」と同音であるからだという。つまり、「仁義礼智忠信孝悌」の八義を忘れるとの意味で倦厭されるというのである。そして、亀は鶴と同じく長寿の象徴であり嫌われてはいないが、鼈が多淫多倫の動物として嫌われており、亀は見た目が似ているために意匠として利用することを避けられているとある。兎は北部の都市で忌避される画題として挙げられている。愚かな動物とみられている上に「男娼」を意味するものとして敬遠されるとある。亀も兎も、日本陶磁器の意匠としては一般的に用いられるものであり意外に感じるが、中国磁器の意匠の中に亀や兎をみることは、日本陶磁器に比べてはるかに少ないのは確かである。

この他には、ヨーロッパで評価の高い日本の景色風俗を描いたものは清国人にはあまり興味がなく、素足を見せている夫人の図は春画を意味するため避けるべきとある。更に、奇数を忌

み偶数を好むので揃い物の数に注意をすること。好まれる画題についても古来より奇数でよいものとされているもの（三友、三秋、竹林七賢等）以外は、どのような場合も常に偶数になるように注意しなければならないこと。商売において清国人が避ける数字（250、360等）があるので注意が必要である事等が指摘されている⁹。

清国向けの陶磁器の商況報告に共通するのは、清国各地で需要があった陶磁器の多くが、意匠、器形のどちらをとっても日本国内で生産されていた製品との共通点が多いという点である。ただ、多くの製品が一对であることを求められることや、亀、兎といった特定の意匠を忌避するなど、日清間の相違点も存在した。そのため、ここで紹介した報告などが参考にされ、清国人の嗜好に則した製品が選ばれたということであろう。後述するが、明治期の清国向け陶磁器輸出は日本の売込商が各生産地で仕入れをし、貿易港の清国商人に売り込むのが一般的であった。そういった目的のために、これらの調査報告が用いられたと考えるのが妥当であろう。

2. 清国向け陶磁器輸出における神戸港の役割

1858（安政5）年の安政五か国条約を受けて開港した横浜は、幕末から明治初期にかけての日本の対外貿易の中心として栄えた。大半の貿易品は横浜から日本に輸入され、逆に生糸や陶磁器などの貿易品の多くは横浜から欧米各国に輸出された。近代の美術工芸に関連する研究では、貿易の玄関口としての横浜港の地位について特に疑問を呈することなく進められてきた感がある。本論考で対象とする陶磁器輸出についても、どの窯業地の製品がどの貿易港を通じて輸出されたのかについてはこれまであまり論じられてこなかった。しかし、後述する統計資料を見てみると、1880年代以降、横浜港は陶磁器の輸出港としては後退を続けていたという事実がある。では、明治期を通じて貿易額が拡大を続けた陶磁器貿易は、何処を中心に行われていたかと言えば、それは1868（慶應4）年1月1日に開港した神戸港、及び大阪港である。

陶磁器輸出に関する神戸・大阪の役割については、これまで横浜程に注目されてきたとは言えない。全体的な明治期の傾向をみれば、横浜は輸出偏重で黒字続き、神戸は輸入偏重で赤字続きであり、この意味において横浜は日本第一位の貿易港として認識をされ続けてきたと言える¹⁰。統計資料から陶磁器輸出額のみを抽出しなければその実態がわからなかったことが、これまで関西の二港を経由した陶磁器輸出が注目をされることのなかった原因と考えることができる。そこで、まずは近代の陶磁器を中心とする美術工芸品の貿易の中心地となった神戸港の歴史を概説し、その清国向け輸出における役割を明らかにする。そして、明治後期には神戸港にかわり大阪港が清国向け輸出の拠点となるため、後半ではこの二港をめぐる関係についても触れる。

2-1. 神戸開港

タウンゼント・ハリス（1804-1878）は1858年の日米修好通商条約の締結にむけて、関西経済の中心であった大阪との貿易のために堺港の開港、及び船舶の為の係留地、整備地の目的で兵庫港の開港を幕府に迫った。幕府は大阪への外国人の立ち入りは認めたが、京都の防衛のため、そして、皇室とつながりの深い奈良が近いために、堺の外国船への開港は認めなかった。条約締結後、横浜、函館、長崎、新潟の4港は直ちに開かれたが、兵庫については居留地の準備や新しく港を建設しなければならないという理由から、開港するのは1863年と決められていた。しかし、その期限は守られることはなく延期され続けた。1851年のロンドン万博へ日本文物のコレクションを出品し、1859年から1864年まで英国の初代駐日総領事を勤めたラザフォード・オールコック（1809-1897）は、「1863年1月が（兵庫開港の）期限であった、しかし日本政府は長い間その期限を延期しつづけることを最重要課題としていた」¹¹と幕府の兵庫開港における対応を批判している。

更に、当初開港するとした兵庫港は居留地建設のための敷地の確保が困難であるという問題があった。そこで代替案として兵庫港から比較的近く敷地にも余裕のある住人140戸あまりの農村、神戸に居留地と港を建設し開港することとなったのである¹²。1868年（明治元）によく開港した神戸港について、1868年3月28日付のイラストレイティッド・ロンドン・ニュースは、以下のような記事を掲載している。

本年初日、すべての文明国との貿易のため、日本の兵庫港〔神戸港〕と大阪港〔川口〕が開港した。〔中略〕一般的にこれまで江戸郊外の横浜と古いオランダ人が居留地を形成した長崎での活動に規制されていた英国、仏国、米国そしてその他の外国商人は、これより大阪に居住を許され、そして、兵庫港〔神戸港〕に埠頭や倉庫の建設が許された¹³。

神戸と同時に開かれた大阪の川口は水底が浅く大型船の利用には不向きであったため、外国貿易は神戸を中心に行われるようになっていった¹⁴。神戸開港の直前の1867年に（慶應3）発行された官報には「一般人民へ 来る十二月七日より兵庫開港江戸並大阪市中へも交易の為め外人居留致候筈に付諸國の物産手廣に運出商賣可為勝手者也」¹⁵と、日本人に外国貿易を推奨している。この後、神戸は貿易港として発展を続け、1880年代後半には外国製品の輸入額第1位、そして横浜に次ぐ輸出額2位の貿易港となったのである¹⁶。

2-2. 神戸港と清商

清国人との交易は江戸幕府下においても認められており、長崎には多くの清国の商人（清

商)が既に居住していた。神戸開港後間もなく長崎の清商10数人が大阪、神戸で漢方薬などの売買を始めたという記録が清国人による神戸港での貿易の嚆矢とされている¹⁷。開港当初、清国人は神戸への居住を公式には認められていなかったが、既に1870年(明治3)には増え続ける清国人人口の把握が必要となり、清国人取締仮規則が設けられた。その時点で190人程が神戸に居住していたと記録されている¹⁸。神戸に滞在していた清国人全員が不法滞在であったというわけではなく、中にはそれ以前に合法に神戸に入った者もいた。神戸に居留を許された欧米人は、非欧米人の従者の帯同を許されており、たとえば、ハリスは5人の中国人従者を連れて下田に到着している。その5人の内訳は執事、2人の料理人、裁縫師、洗濯師で、皆ハリスが日本到着前に立ち寄った香港で雇われた¹⁹。ほとんどの欧米人は日本入国に際して中国語を使える従者を帯同しており、公式に神戸に入った初めての清国人はこういった人々だっただろう。彼らは清国南部沿岸の都市で雇用され、安価な上に、英語を話す者については漢字を使えるために通訳として雇われることも多かった。また、買弁といって、欧米の商社に雇用され商品の買い付けを担当した者もいたのである²⁰。

1873年(明治6)に鉄道技師として神戸に入ったE・G・ホルサム(生没年未詳)は神戸に居住する中国人について以下のように述べている。

横浜が神戸と比較して約5倍の大きさであることを除けば、2港に本質的な違いはそれほどない。どちらの港も商業区があり、岡の上に邸宅が並び、土着民の街があり、港がある。[中略]岸に水夫がおり、警察官はずる賢く警棒と眼鏡を隠しもち、清国人は生活のために十分なお金が溜まる日を我慢強くまっているというような光景が、目に見える住人の多くを形成している²¹。

すでに1873年には、このように神戸の景観を象徴する要素として清国人が挙げられている。そして、神戸に清国理事府が設立されて公式に清国人の神戸への居住が認められるようになる1878(明治11)年以降に、その人口は更に増加した²²。籠谷直人によると、1880年代から90年代前半は、清国の物価高と日本の物価安の時代であったという。その結果として対清国輸出が促進され、日本からの輸入拡大をはかった清商が勢力を拡大したのだという²³。(資料3)は神戸在留の外国人人口を中国人と欧米人に分けて示したものである。1878年には既に、清国人の人口が全外国人中最も多く、全欧米人を足した数よりも清国人のほうが多いというような状況であった。例えば、1890年(明治23)に登録されていた清国人は1,433人、一方、全欧米人を合計してもわずか606人であった。

当時の様々な文献から神戸の繁栄ぶりを垣間見ることは出来るが、ここでは特に神戸を実際

に訪問した清国人の言葉に注目をしたい。1898年（明治31）、江西省の日本視察団の一員として日本を訪れた朱綬（生没年未詳）という人物がいる。彼が視察に参加した目的は、西洋式学校を設立するにあたっての日本の教育制度を視察することであった。朱綬の日本滞在記である『東游紀程』には、当時日本に在留していた清国人についての記述がある。彼らはその活動拠点から福建省と広東省と長江下流域の三種に分けることができ、横浜には3,000人、神戸、大阪には5,000人、そして長崎に2,000人いると述べている²⁴。この数字が示すとおり、神戸・大阪の清国人人口は日本の貿易港中最大であった。そして、1898年8月18日、朱綬は実際に神戸を訪れ、街並みは整然としており清潔で、長崎に似ているが更に繁栄しているとの感想を述べている²⁵。

1906年に神戸を訪れた李寶詮（1864-1920?）は神戸の外国貿易について、日本滞在記『日游瑣識』中で述べている。李によれば、神戸の外国貿易は1872年（明治5）に始まり、貿易額は年々増加した。以前は、外国貨物はまず横浜に輸入されその後神戸にもたらされたが、この14、5年の間、外国商館は神戸に支店を設けて船舶が寄港することも多くなった。その結果として、横浜の商業は徐々に衰退し阪神は益々栄えているのだらうと述べている²⁶。

このように、神戸開港後の10年間は港の設備が整わず、日本の国際貿易の大半は横浜が担っていた。しかし、神戸に国際的な貿易港としての設備を整えば、関西圏の日本人業者はわざわざ遠い横浜港の清商相手に貿易を行う必要性が薄れていった。こうして着実に発展を続けた神戸は1880年代に横浜と並ぶ貿易港に成長し、神戸在留の清商を通じて多くの日本陶磁器が清国に輸出されたのである。

2-3. 清国向け日本陶磁器と神戸港、大阪港

神戸は1868年に開港した。京焼では1871年の尾崎錦雲堂の進出を皮切りに、神戸港を経由した輸出が始まった。1873年尾張の磁器が持ち込まれ、すぐに京焼を凌ぐ人気となり、同時期に信楽の陶器も売り出されて好評を博したという²⁷。しかし、対中国貿易が発展するまでには開港後数年を要した。公式に神戸が開港された時に、清国は日本との条約を未締結であったことがその原因である。1873年、日清修交条規が批准され、ようやく清国人商人に公式に貿易の門戸が開かれたが、開港直後よりその貿易品目に陶磁器が挙げられている²⁸。

（資料4）は陶磁器の総輸出額をそれぞれの貿易港別に表示したものだが、1882（明治15）年の輸出陶磁器の売上高の6割以上が横浜経由であった。先述の荒川巳次の報告では1883（明治16）年頃、中国輸出が始まったとされているが、これは神戸の輸出高が増加し始めた時期と一致する。徐々に日清貿易の拠点となっていく神戸港の陶磁器輸出額は増加を続け、1891（明治24）年に神戸は横浜を抜き日本最大の陶磁器輸出港となった。近代を代表す

る窯業技師として知られる北村彌一郎（1868-1926）の報告によれば、1900（明治33）年、清国本土向けの陶磁器の73パーセント、香港向けの87パーセントが神戸から輸出されたものであったとしている²⁹。

清国向けの陶磁器貿易は日本の商業者による直輸出はまれで、主に清商を通じて行われていた。例えば、1887（明治20）年に神戸から上海に輸出された陶磁器に対する清商の取り扱い率は全体の96.5パーセントにのぼる³⁰。1908（明治41）年4月の『大日本窯業協会雑誌』には、清国と朝鮮向けの日本陶磁器についての報告が掲載されている。そこには「清韓地方に於ては直接取引するもの稀にして横濱の萬福洋行を始めとし、神戸の清商連により続々注文を受けて製作し³¹とあり、明治期の最晩年に至っても日本の陶磁器輸出は基本的に清商を介してなされていたことがわかる。陶磁器貿易は日本の売込商が各生産地で製品を仕入れ、それを貿易港の清商に売り込み、その後、清国全域に広がる清商の販売網を通して売りさばかれたのである³²。これを表すかのように、1893（明治26）年の広川繁四郎の『神戸港内外商家便覧』には、神戸で開業する17の日本の陶磁器商、34の清商が列挙されている³³。

1903年（明治36）、神戸港からの清国向け陶磁器貿易に大きな変化が訪れる。それは、貿易港としての大阪港の台頭である。先述したように大阪の港は神戸と同じく明治初年に開港したが、貿易港としての役割をあまり果たしてはいなかった。しかし、明治後期になると大阪にも外国船が寄港可能な港を建設するべきであるという気運が高まり、1897年（明治30）に第1次修築工事がはじまった。1903年8月に大型船が係留できる大棧橋が完成し、一般船舶に使用が解放されると³⁴清国向けの輸出陶磁器をとりまく状況が一変する。1906年（明治39）までのたった3年の間に清国北部諸港向けの輸出陶磁器の8割が、神戸ではなく大阪から輸出されるようになったのである³⁵。一方、神戸港は清国南部向け製品の輸入拠点である香港向け製品の輸出に特化していくこととなる³⁶。1900年には陶磁器輸出の大半は神戸港が担っていたことは既に述べた。しかし、そこからのたった6年後の1906年には大阪港が清国向け陶磁器輸出額で日本最大の貿易港になったのである。

明治維新以前から日本の対外貿易の中心であった横浜港は、陶磁器輸出額に限って言えば1891年に首位の座を神戸港に明け渡している。そして、神戸は着実に陶磁器輸出額を伸ばし、その後も日本陶磁器の輸出港として最重要の港であり続けた。清国向けの陶磁器輸出については、1900年の資料で輸出額の8割以上を神戸港が占めているため³⁷、対清貿易が本格化した1880年代には既に輸出の拠点となっていたと思われる。しかし、清国向けの陶磁器輸出に関しては、1906年に成長著しい大阪港に輸出額首位の座を奪われることとなったのである。

おわりに

清国向けの陶磁器輸出は1880年代から拡大を続け、一時は米国への輸出額を凌ぐほどの規模となった。その貿易を担った清商の拠点は国内最大の清国人コミュニティを有した神戸港である。明治後期になると、清国北部向けの輸出に限っては大阪港が神戸港を凌駕し、それ以降は、清国南部向けは神戸港、北部向けは大阪港の清商を中心に陶磁器輸出が行われたのである。そして、日本陶磁器の一大市場とも呼べる清国の嗜好に沿った製品を輸出するため、1907年の農商務省の報告に代表されるような市場調査が行われた。日本人にとって縁起の良い画題は中国文化にその源流を認められるものが多いが、陶磁器意匠における嗜好は日清間だけでなく清国地域間でも多少の差異が存在した。こうした差異に留意し、数多くの日本陶磁器は清商に販売され、清国国内で消費されていたのである。

注

- 1 前崎信也「明治期における清国向け日本陶磁器 (1)」(『デザイン理論』60号, 2012年, pp.75-87)。
- 2 前崎前掲書, pp.77-79。
- 3 前崎前掲書, pp.80-81。
- 4 荒川巳次「天津における磁器商況」(『大日本窯業協会雑誌』第一集三號, 大日本窯業協会, 1892年, p.67)。
- 5 井上孝之助「北清に於ける陶磁器の販路と日本陶磁器の現状」(『大日本窯業協会雑誌』第13集149號, 1905年1月, pp.173-178) pp.173-176。
- 6 清世逸民「京都通信」(『大日本窯業協会雑誌』第14集161號, 1906年9月, pp.576-578) p.577。
- 7 農商務省商工局編『輸出品ノ製作上ニ及ホス海外ノ風習』(農商務省商工局, 1907年)。
- 8 「輸出品の製作上に及ぼす海外の風習」(『大日本窯業協会雑誌』第16集180號, 1907年8月, pp.384-399)。「輸出品の製作上に及ぼす海外の風習」(『大日本窯業協会雑誌』第16集181號, 1907年9月, pp.23-38)。
- 9 農商務省商工局編前掲書, p.24。
- 10 神戸市編『神戸港之外国貿易』(神戸市, 1913年, pp.35-56)。
- 11 'January 1863 was the period fixed [to open Kobe], but the Japanese Government had long manifested the most urgent desire to have the period deferred.' Rutherford Alcock. *The Capital of the Tycoon: A Narrative of a Three Years' Residence in Japan*, vol.2. New York, Harper & Brothers, 1863, p.103.
- 12 開港をするのが約束した兵庫港ではないために諸外国から条約違反との指摘があったが、これについては廃藩置県で新しく生まれた県名を兵庫県とすることで乗り切ったとされる。これは神奈川港を開くと約束して横浜港を開いたために、神奈川県が誕生したことと同じ経緯であるといわれている。
- 13 'The opening, on the first day of this year, of the port of Hiogo [Hyōgo] and city of Osaka [Osaka], in Japan, to the commerce of all civilised nations. [...] The British, French, American, and other foreign merchants, who have been restricted, hitherto, for the most part, to Yokohama, a suburb of

- Jeddo [Edo], and to Nagasaki, where the old Dutch settlement was formed, will now be allowed to reside at Osaka; and a convenient site has been granted to them for the erection of wharves and warehouses in the port of Hiogo.' Terry Bennett, comp. and intro. *Japan and the Illustrated London News: Complete Record of Reported Events 1853-1899*. Kent, Global Oriental, Ltd., 2006, p. 187.
- 14 大阪港史編集委員会『大阪港史 第一巻』（大阪市港湾局，1959年）p. 38。
 - 15 村田誠治『神戸開港三十年史 上』（開港三十年記念会，1899年）序。
 - 16 Issac Martins「明治期に於ける貿易史の研究 神戸港を中心に」（『六甲台論集 — 経済学編 —』第49巻4号，2003年1月，pp. 58-73）。
 - 17 村田前掲書，pp. 480-481。
 - 18 洲脇一郎，安井三吉「明治初期の神戸華僑 — 兵庫県の華僑政策と明治10年籍牌を中心として」（『論集：神戸大学教養部論集』，42号，1988年10月，pp. 1-28）p. 4。
 - 19 Townsend Harris. *The Complete Journal of Townsend Harris: First American Consul and Minister to Japan*, Revised Edition. Rutland, Vermont; Tokyo, Charles E. Tuttle Company, 1959, p. 173.
 - 20 明治初期に神戸に居住した清国人は，貿易商，清国人向けの商売の経営者，西洋人に雇用された者，港で働く沖仲士や無職の者の四種類に分類できる。中でも下層階級に所属する者が大半であった。西島民江「明治前期における神戸華僑への視線」（『待兼山論叢・日本学編』第27号，1993年，pp. 15-32）pp. 17, 31。
 - 21 Hugh Cortazzi. *Victorians in Japan: In and around the Treaty Ports*. London, The Athlone Press, 1987, p. 164.
 - 22 洲脇一郎，安井三吉前掲書，p. 4。
 - 23 籠谷直人『アジア国際通商秩序と近代日本』（名古屋大学出版会，2000年）pp. 62-71。
 - 24 「我〔中略〕問在東貿商之華人共有若干答華商約分三帮曰閩曰粵曰三江現寓横濱有三千餘人神戸大坂有五千餘人長崎有二千餘人」（朱綬『東游紀程』1898年（光緒25），pp. 9-10）。
 - 25 「大抵塵里端直瓮宇齊平道路淨潔規劃略如長崎而繁盛遠過之至」（朱前掲書，p. 8）。
 - 26 「神戸之外國貿易。自明治五年後。日見增益。自三十四年。比較三十年以前。總額約增三十一倍。…十五年至三十四年。竟增至每年平均額一億三千九百四十六萬。比十年前又多五倍半。當貿易未盛時。外國貨物。先輸入横濱。復折回神戸。十四五年間。外國商館。加設支店於神戸。船舶之寄港者亦多。故直輸本港。轉運省而貿易益進。竊謂横濱之商業當漸衰。而神阪當日盛。華商於神阪最近。倘國家有以補助而鼓勵之。其進步實有艾也。」（李寶詮，『日游瑣識』，1906（光緒32）年，p. 58）
 - 27 村田前掲書，pp. 480-481。
 - 28 開港直後の神戸港の陶磁器輸出額は以下を参照。（神戸貿易協会編『神戸貿易協会史 神戸貿易百年の歩み』神戸貿易協会，1968年，p. 50）
 - 29 北村彌一郎「清國窯業視察報告」（大日本窯業協会編，『工学博士北村弥一郎窯業全集 第二巻』大日本窯業協会，1929年）pp. 364-365。
 - 30 町田實一『日清貿易参考表』（1889年），籠谷前掲書，p. 65。
 - 31 「京都の陶磁器」（『大日本窯業協会雑誌』第16集188号，1908年4月，pp. 384-386）p. 385。
 - 32 宮地英敏『近代日本の陶磁器業』（名古屋大学出版会，2008年）pp. 55-57。
 - 33 広川繁四郎『神戸港内外商家便覧』（1893年，pp. 8-9，pp. 74-75）p. 116。
 - 34 大阪港史編集委員会前掲書，pp. 261-262。
 - 35 北村前掲書，pp. 364-365。

- 36 籠谷直人によれば、1900年代に綿糸の販売に関して大阪の華僑商人が取引に乗り出し、結果として神戸華僑は綿糸取引から手を引いたという。この大阪の華僑商人とは華北の山東省出身であるとされ、日清戦争後に清国北部に日本の威力が及んだために大阪に進出を始めた。一方、神戸の清商は清国南部を拠点とするものが多かった。大阪が清国北部向けの陶磁器輸出を神戸から奪い、神戸が香港向けの陶磁器輸出のみに特化するのはこのあたりの事情と関係していると推測できるが、籠谷の研究は綿糸に関するものであるため更なる検討が必要であろう。(籠谷前掲書, pp.136-141)
- 37 北村前掲書, pp.364-365。

(資料1) 清国都市別の陶磁器意匠における嗜好

都市	嗜好される意匠	忌避される意匠
牛莊	鶴, 鷹, 鳩 (紅色), 孔雀, 燕, 鳳凰, 錦鶏, 鴛鴦, 鵲, 蝙蝠, 蜂 [蜂], 蝶, 鹿, 馬, 駱駝, 獅子, 象, 虎, 飛龍, 豹, 羊, 雙美人, 山水, 両仙人, 双童, 壽星, 文昌星, 鶯栗花, 水仙花, 梨花, 桂花, 蘭, 菊, 梅, 竹, 松柏, 薔薇, 菜莉花, 牡丹, 唐草, 氷文, 雲, 桃, 福喜壽, 福喜壽「クズシ」, 雙喜, 貴, 萬, 禄, 雷紋, 如意, 萬不断, 鯉魚, 金魚, 雙魚, 魚鱗, 狗牙兒 (山ヲ繫キタル形), 銅錢ノ形, 方色兒	兎, 蟹, 狗, 猿, 驢, 鬼, 龜
天津	鹿, 蝠 (蝙蝠), 鶴, 龍, 胡蝶, 麒麟, 金魚, 鯉魚, 鴻雁, 牛, 馬, 鳳凰, 獅子, 公鶏 (牡鶏), 孔雀, 牡丹, 葫蘆, 三仙又ハ三多 (桃, 石榴, 仏手柑), 三秋 (桂花, 海棠, 竹), 九如 (三秋, 菊, 蘭, 蠟梅, 夜来香, 僧道帽, 玉針), 芍薬, 梅, 杏, 荷花 (菡), 葡萄, 百合花, 松, 靈芝, 明確ナ縦棒縞, 大柄の格子縞, 海棠・梅, 松・鶴, 靈芝・松・鶴, 鹿・蝙蝠・桃 (福祿寿), 清国人ノ目ニ馴レタル支那ノ人物画風俗画, 歴史画	烏, 梟, 燕, 狗, 兎, 鼈, 猫, 驢子, 楓樹, 梧桐 (鳳凰カ描カレレハ可), 日本・西洋の人物風俗, 半身像, 首像, 不明瞭煩雜ナ縞柄
杭州	鳳凰, 鶴, 鹿, 蝙蝠, 胡蝶, 花卉 (牡丹, 梅, 竹, 蘭, 菊, 桃, 水仙), 果實 (桃, 葡萄, 石榴, 仏手柑), 靈芝, 「喜」字, 「壽」字, 卍字, 雲引, 八仙人, 十二花人, 天宮, 和合二仙, 外國品ナレハ新奇ノ模様	龍, 蛇, 龜, 鼈, 鰐, 烏, 梟, 鬼, 妖魔
沙市	魚翁得利, 富貴白頭, 和合二仙, 魚龍変化, 五老觀図, 十八學士, 竹林七賢, 猫蝶図, 紡織共理, 兩京風味, 龍鳳呈祥, 三星	虎, 蛇, 龜, 鬼, 散髮婦人, 五爪龍
重慶	竹葉, 牡丹, 蝴蝶, 蝙蝠, 団花, 散花, 福祿寿 (眉目圓滿ノ人物・高位戴冠ノ人物・白髭長老ノ人物), 鳳凰, 麒麟, 孔雀, 芍薬, 鶴, 鴛鴦, 聖賢の像・美人絵 (共ニ支那人ノ像), 後宮蓮歩ノ図, 兒童遊戯ノ図, 支那風ノ景色, 富貴跟猫 (牡丹ニ猫ノ絵・婦人等), 官上加官 (花ノ傍ニ雄鶏及母鶏ヲ添付スル), 三星 (七福神)	龜, 鬼, 素足ノ顯セル夫人画, 大黒, 五爪龍, 日本美人, 日本ノ景色
長沙	四君子, 「福」字, 「壽」字, 「囍」字, 雲形, 蝙蝠,	外国風ノ図様
福州	猿, 桃, 蝙蝠, 鹿, 歴史上ノ事跡, 古代ノ貨幣, 鏡鼎, 鈴, 刀劍	龜, 鬼, 烏, 蛇, 蛙, 狐, 狸, 鼠, 豚, 妖怪, 外国ノ風俗歴史, 本邦歴史上ノ人物, 本邦ノ風俗画

厦門	吉兆、安佚、幸福、佚禄、壽老、牡丹、蓮花、梅、蘭、菊、水仙、竹、椿、海棠、桃、薔薇、鹿、蝙蝠、猿猴、龍、虎、麒麟、鳳凰、孔雀、鶴、金鶏、金魚、鯉魚、十干十二支、西苑雅集、湘瀟八景、竹林七賢、曲水流觴、桃源、西湖、綠野、赤壁、寿老人、西王母、楊貴妃、仙女、古鐘、目折、弊古錢、石鼓、古磚、未央宮銅雀台の磚瓦の模様・文字	五爪龍、龜、鬼、狗、猪、猛獐ノ種類、首揚山、汨羅
----	--	--------------------------

* 農商務省商工局『輸出品ノ製作上ニ及ホス海外ノ風習』1907年の内容を元に作成

(資料2) 清国都市別の嗜好される意匠・忌避される意匠とその理由

嗜好される意匠

鹿：【天津】福祿ト字音相通スルヨリシテ之ヲ喜フコト甚タシ多クハ之ニ松樹ヲ配ス。又鹿ニ鶴ヲ配スレハ鶴ノ高貴ト鹿ノ福祿トヲ併セ有シテ幾久シク高貴タランコトノ表彰トナルト言フ。【福州】祿ヲ示ス。祿ト同音ナルヲ以テ大ニ之レヲ喜ヒ。

蝠（蝙蝠）：【天津】福ト字音相通スルヨリ亦多ク之ヲ好ム。【重慶】蝠ノ字福ノ字ト同音ナルカ故ニ歓迎セラル。【福州】福ヲ示ス。【厦門】福ト同音ナルヲ以テ大ニ之レヲ喜ヒ。

鶴：【天津】高貴ヲ意味ス。

龍：【天津】皇帝ノ記表ニシテ高貴ニ過クルヲ以テ民間用ノモノニハ之ヲ用キス。【厦門】清延ノ記章ナルヲ以テ之ヲ憚ル様信セラル、モ■ハ一知ッテニヲ知ラサルノ誤解ニ属ス何ントナレハ龍ハ騰上ノ意味ヲ以テ一般ニ嗜好セラルレハナリ。但五爪ノ龍（五指アルモノヲ云フ）ハ宮章ナルヲ以テ庶民ノ陽ニ之レヲ避クルコト譬ヘハ日本ノ十六葉ノ菊ニ於ケルカ如クナレ共無論菊章ニ於ケルカ如キ尊嚴ナルモノニアラス。陶器、銅器、漆器若ハ織物即チ金襴緞子等ニ標識セラル、五爪ノ龍ハ官民舉テ之レヲ官窻官造云々ト稱シ頗ル之レヲ得ルヲ欲ス其精工タリトノ故ヲ以テナリ。而シテ之レヲ裝飾ニ之レヲ實用ニ比々皆相供セリ。一言ニシテ之レヲ蔽ヘハ五爪ハ官造ノ外現ニ個人ノ之レヲ製造スルヲ許サスト云フニアリ（規定ノ當時ハ無論之レヲ使用スルヲ禁セラレタリ）。四爪ハ親王ノ記章トシ三爪ハ普通ニ属ス故ニ三爪ハ如何ナル場合如何ナル人民モ一般ニ之レヲ製造シ得ヘク之レヲ使用シ得ヘシ。視ヨ江西ノ陶器復讐ノ漆器或ハ各種ノ織物上多クハ丸龍騰龍其他種々ノ龍ヲ表出シ斯クシテ一般ノ人氣ヲ博シツ、アルニアラスヤ。故ニ龍ハ一般ニ最も愛重セラル、モノト信シテ不可ナシ。

蝴蝶：【重慶】只其格恰好キヨリシテ見場好キヨリシテ用キラルニ過キサルヘキ。

麒麟：【天津】走獸中最モ多ク喜ハル。

金魚：【天津】好ム其形ハ何處マテモ所謂支那金魚形ニシテ目ノ飛出シタルモノニ限ル然ラサレハ金魚トハ視ラレサルナリ。

鯉魚：【天津】水ニ躍ルハ其高昇ノ速ナル登天ノ義トナルナリ。

鴻雁：【天津】吉兆アリ又信義ノ鳥トシテ之ヲ好ム。

牛：【天津】天地祝祭ノ場合ニ之ヲ用キ且ツ稼穡ヲ助クルモノナレハ吉ト能トノ點ヨリシテ之ヲ好ム。

馬：【天津】吉祥ト言ヘリ。

鳳凰：【天津】飛禽ニ就テ最モ多ク之ヲ好ム之ニハ必ス梧桐ヲ配スルヲ要ス。

獅子：【天津】高貴、氣品高キ點ヲ取ル。

公鷄（牡鷄）：【天津】高官ニ就クヲ意味ス之ニ牡丹ヲ配スレハ鷄ノ冠ニ由リテ官位ノ高キヲ意味シ牡丹ノ富貴ノ花ナルカ爲メ高位ニ上リ富貴トナルノ緑[祿]喜ナリトシテ之ヲ好ム。又牡鷄トノ鷄頭花トヲ併セ畫カハ冠上冠ヲ加フルモノナルヲ以テ官位更ニ上ルヲ意味スルトナリ。

牡丹：【天津】花ノ開キタルハ富ヲ彰シ未開ノ花ハ官位ノ貴キヲ彰ハス。【重慶】只其格恰好キヨリシテ見場好キヨリシテ用キラルニ過キサルヘキ。【厦門】花ノ富貴ナルモノニ因ミ賞美セリ。

葫蘆：【天津】子孫繁榮ノ表彰ナリ。

松：【天津】常緑ヲ喜フ。

靈芝：【天津】海棠，靈芝，梅ヲ併セ畫クハ甚タ可ナリ。靈芝ニ松ト鶴トヲ併セ畫クハ靈ヲ延ハストシテ多ク之ヲ喜フ。鹿ニ祿，蝙蝠ハ福ヲ表ハシ而シテ桃ハ長壽ノ靈藥トシテ珍重シ蝠，鹿，桃，ヲ併セ畫キテ以テ福祿壽ヲ表スナリ。

猿：【福州】延年ノ標。【厦門】侯ト同音ナルヲ以テ大ニ之レヲ喜ヒ。

桃：【福州】延年ノ標。

蓮：【厦門】花ノ君子ナルモノニ因ミ賞美セリ。蓮花ハ日本ニテハ佛ニ因ムトテ或ハ厭惡スルモノアルモ支那ハ然ラス夏季大家ハ庭前ニ蓮花ヲ盆栽シテ裝飾トナス是レ其一例ナリ。

文字：【厦門】一字限りニシテ直ク廢棄スルモノニハ宜シカラス惜字ノ習慣アレハナリ。

忌厭される意匠

烏：【天津】凶兆ナリ大ニ之ヲ忌ム。

梟：【天津】陰惡，不孝，不吉ノ鳥トシテ之ヲ忌ムコト甚タシ。

燕：【天津】不貞，不節，不慈ノ鳥ナリ。

狗：【天津】猛烈ナルヲ以テ之ヲ好マス。

兎：【天津】愚魯，又男娼ヲ意味スルモノナリトシテ之ヲ忌ム。

鼈：【天津】龜ハ古來千鶴萬龜ト稱シ龜其物ハ壽福ノ記表トシテ之ヲ喜フニハ相違ナケレトモ龜ニ似テ大ナルモノニ鼈ナルモノアリ多淫多倫ノ生物ニシテ忘ハト稱シ極端ニ之ヲ忌ム故ニ會々鼈ニ非サル龜ヲ畫クモ容易ニ鼈ニ似合ヒ若クハ之ヲ聯想シ勝ナルヲ以テ斷シテ之ヲ避クルヲ要ス。

龜：【重慶】龜ハ俗ニ忘ハト稱シ仁義禮智忠信孝悌ヲ忘却セル痴人ヲ意味スル。【厦門】龜ハ俗ニ之レヲ「ワンバ」ト稱ス忘ハト同音即チ忘ハトハ仁義禮智忠信孝悌ノ八義ヲ忘ルトノ謂ニ係ルヲ以テナリ。

五爪龍：【沙市】古來皇室用ノ外一般ニ之ヲ使用スルコトヲ憚ルト云フ。【重慶】龍ハ帝國ノ紀章ナルカ故ニ民間圖様ニハ必ス龍ノ爪ヲ減シ四爪ト為スノ習慣アリ。

鬼：【重慶】惡魔不吉ヲ意味スル。

足ヲ顯ハセル夫人畫：【重慶】春畫ヲ意味スルカ故ニ宜シク注意スヘシ。

大黒：【重慶】清國ニテ大黒ノ二字ハ暗黒不明ヲ意味（但清國ニ大黒ノ圖ナシ）。

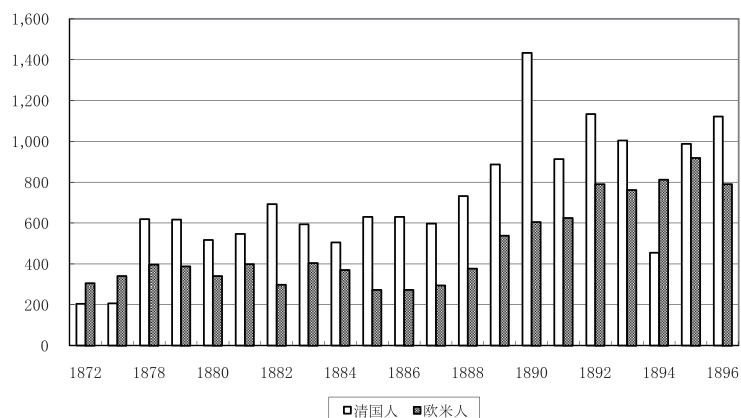
薔薇：【厦門】薔薇ハ刺子ナリトテ嫌忌スルモノ尠ナカラス。

首陽山：【厦門】商品上決シテ用ウ可カラス。蓋シ不幸ヲ意味スレハナリ。若シ夫レ模様トシテハ古金石即チ古鐘，目折，彝，古錢及石鼓古磚即チ未央宮銅雀臺ノ磚瓦ノ模様并其文字等トス。陶器，漆器，彫刻物ノ上ニ慣用スル多シ。

汨羅：【厦門】商品上決シテ用ウ可カラス蓋シ。不幸ヲ意味スレハナリ。若シ夫レ模様トシテハ古金石即チ古鐘，目折，彝，古錢及石鼓古磚即チ未央宮銅雀臺ノ磚瓦ノ模様并其文字等トス。陶器，漆器，彫刻物ノ上ニ慣用スル多シ。

*農商務省商工局『輸出品ノ製作上ニ及ホス海外ノ風習』1907年の内容を元に作成

(資料3) 神戸の外国人人口



* 西島民江「明治前期における神戸華僑への視線」(『待兼山論叢』27号, 1993年) p. 17の表を元に作成

(資料4) 貿易港別陶磁器輸出額

	横浜	神戸	大阪	長崎	函館	門司	その他	合計
1882	378,085.44	169,236.70	2,205.22	29,213.18	0.75	0.00	0.00	578,641.29
1883	309,740.68	178,160.87	2,937.11	52,922.91	0.00	0.00	6.60	543,768.17
1884	322,513.21	165,210.46	7,772.68	29,611.56	2.50	0.00	822.70	525,933.11
1885	375,998.53	241,833.21	13,945.17	62,851.23	0.00	0.00	641.03	695,269.17
1886	545,802.41	334,518.20	36,641.43	85,101.78	0.00	0.00	320.60	1,002,384.42
1887	678,305.42	505,007.29	25,360.49	99,845.04	0.00	0.00	3,383.20	1,311,901.44
1888	644,399.74	555,786.97	9,306.52	80,823.35	0.00	0.00	4,999.71	1,295,316.29
1889	763,926.92	606,853.38	2,581.86	68,327.06	0.00	0.00	8,198.91	1,449,888.13
1890	595,007.84	575,502.96	2,842.50	56,703.16	0.00	0.00	15,900.30	1,245,956.76
1891	545,896.65	653,921.73	15,801.55	59,604.10	0.00	0.00	11,802.93	1,287,026.96
1892	592,586.02	805,532.30	3,280.09	60,078.43	0.00	0.00	18,934.16	1,480,411.00
1893	657,513.68	836,980.15	5,651.33	65,245.57	0.00	0.00	11,799.96	1,577,190.69
1894	589,430.17	824,253.80	5,044.26	56,246.43	20.00	0.00	9,859.18	1,484,853.84
1895	752,578.31	1,127,806.53	2,781.60	53,079.88	346.02	0.00	18,467.79	1,955,060.13
1896	733,426.99	1,163,717.34	2,712.60	52,512.80	294.50	0.00	22,189.88	1,974,854.11
1897	562,435.48	1,146,007.04	9,746.34	48,154.87	622.40	0.00	52,095.14	1,819,061.27
1898	557,495.59	1,280,010.48	16,837.95	74,125.33	734.00	0.00	61,577.58	1,990,780.93
1899	519,839.18	1,523,248.65	41,270.16	59,700.10	826.70	0.00	36,450.72	2,181,335.51
1900	454,750.17	1,821,719.51	90,377.58	56,120.37	1,011.00	0.00	47,925.58	2,471,904.21
1901	471,433.72	1,739,201.68	128,627.54	55,943.75	909.89	0.00	95,551.02	2,491,667.55
1902	507,361.72	1,641,346.59	177,678.43	54,254.24	1,683.77	0.00	79,219.30	2,461,544.05
1903	520,209.25	2,287,488.60	152,756.74	41,734.60	2,853.11	0.00	163,966.65	3,169,008.95
1904	533,255.19	2,798,457.14	330,690.40	40,089.99	0.00	0.00	170,528.68	3,873,021.40
1905	633,478.76	3,870,068.54	505,567.64	44,302.33	18.80	0.00	270,908.29	5,324,344.36
1906	800,756.00	5,589,685.00	1,133,693.00	94,508.00	4,669.00	0.00	319,616.00	7,942,927.00
1907	755,785.00	5,090,970.00	785,266.00	68,755.00	1,597.00	0.00	513,661.00	7,216,034.00
1908	464,997.00	2,290,142.00	327,445.00	58,291.00	1,075.00	0.00	1,936,272.00	5,078,222.00
1909	551,866.00	2,181,962.00	284,180.00	33,840.00	130.00	102,886.00	2,102,968.00	5,257,832.00
1910	640,502.00	2,367,585.00	301,345.00	18,030.00	606.00	69,997.00	2,115,858.00	5,513,923.00
1911	721,126.00	2,371,037.00	184,703.00	12,257.00	572.00	55,659.00	2,032,351.00	5,377,705.00
1912	760,176.00	2,421,763.00	236,927.00	17,191.00	112.00	52,829.00	1,962,715.00	5,451,713.00

* 『大日本外国貿易年報』明治15年～大正1年, 1990-4のデータを元に作成